

〈漢字の読み書き〉

① 次のそれぞれの文の——線部の漢字の読み方を、ひらがなで書きなさい。

- ☐ (1) 城を築く。
☐ (2) 氏より育ちといわれる。
☐ (3) むだに時間を費やす。
☐ (4) 事故を防ぐ方法を話し合う。
☐ (5) 母が袋を提げて帰ってきた。
☐ (6) 忘年会の発起人となった。
☐ (7) 地方を遊説する。
☐ (8) 呉服屋で反物を買う。
☐ (9) 図書館の帯出禁止の本。
☐ (10) 私の意図するところ。

② 次のそれぞれの文の——線部のカタカナを、漢字で書きなさい。

- ☐ (1) 魚を海にハナす。
☐ (2) 恩にムクいる。
☐ (3) 口はワザワいのもと。
☐ (4) セーターをアむ。
☐ (5) ワ投げをして遊ぶ。
☐ (6) 海外とのボウエキがさかんになる。
☐ (7) 経費をガツサンする。
☐ (8) 野生動物をホグする。
☐ (9) 彼はネツベンをふるつた。
☐ (10) 道に迷ってオウジョウする。

〈ことばの知識（類義語・対義語／主語・述語／修飾語）〉

③ 次のそれぞれの問いに答えなさい。

- (1) 次のそれぞれの熟語と同じような意味を表す熟語をあとから一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ☐ ① 公平 ☐ ② 勤勉 ☐ ③ 見学 ☐ ④ 刊行 ☐ ⑤ 未開
☐ ⑥ 死亡 ☐ ⑦ 同意 ☐ ⑧ 真心 ☐ ⑨ 手段 ☐ ⑩ 平生
 ア 参観 イ 平等 ウ 原始 エ 発行 オ 努力

カ 他界 キ 平素 ク 賛成 ケ 誠意 コ 方法

(2) 次のそれぞれの熟語の対義語を、あとの漢字を組み合わせて書いて答えなさい。

- ☐ ① 未来 ☐ ② 普通 ☐ ③ 単純
 〈去 将 過 特 復 複 部 来 雜 別 合 分〉

④ 次の(1)～(5)の文の——線部に対する主語を一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

(女子聖学院中)

- ☐ (1) ア母が イ作った ウ弁当を エ持った オ私は カ遠足に キ出かけた。
☐ (2) ア私が イ家に ウ着いた エ時、オ兄は カまだ キ宿題を シていた。
☐ (3) アがらが イ学校の ウ一番 エ大きな オ木の カてっぺんで キ鳴いていた。
☐ (4) アどんな イ時でも ウ彼は エ楽しそうに オほえみながら キ働いた。
☐ (5) アなぜ イあなたは ウ苦勞して エためた オお金を カすべて キ寄付したのですか。

⑤ 次のそれぞれの問いに答えなさい。

(聖学院中)

- ☐ (1) 次の文の アのことは イに対する主語を、記号で答えなさい。
 〈行くのか、アそんな イ体で ウきみは。〉
☐ (2) 次の文の アのことは イが直接かかることは ウを記号で答えなさい。
 〈たぶん ア彼女は イ約束の ウ時間と エ来るはずだ。〉

〔物語〕

⑥ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(神奈川県立大学附属中)

事務用の白い封筒は、角がこすれて丸くなり、いくらか灰色がかったきようだ。

私の名前、住所。細いマジックで書かれた右上がりの文字は、線がともきつぱりしていて、意地つぱりに見える。

私は手紙をもらうまで、広一くんの字を知らなかった。

手紙が来たのは、一昨年の冬だった。郵便受けで見つけたのは弟の進で、まるで暴風のように玄関に飛びこんできた。

「佳奈ア！ 佳奈ア！ おい、広一くんから手紙が来たよっ」

私は、それがどうしたって顔をした。

「ぼく宛と佳奈宛と、ほら」

封筒を受け取ると、①余計なお世話という顔を作ったが、②進はこちら

など見ていなかった。私は自分の手紙を開けずに、弟を観察した。白い便箋一枚。進は、露骨にがっかりした表情になって、「なんだあ。何にも書いてないや。引越したってことだけ」

と独り言のようにつぶやいた。そして、ちよつぱり期待をこめて私を見た。

私は手紙をあごの下にはさんで、上目づかいに進をにらんだ。正確に言うに進のひざのへんをにらんだ。

「おい！」

進が、私宛の手紙の中身を知りたがっているのは百も承知。③私はその奇妙な姿勢のまま両手を広げてバランスを取り、玄関にのこのこ歩いていった。

20

15

10

5

狭い我家は、一人になれる場所なんか、トイレしかない。私は、広一くんからの手紙をトイレで読む気にはなれなかったから、秋に彼と自転車の練習をした東公園に出かけた。

【十二月の公園は、土が白っぽくひびわれ、葉の落ちたケヤキやイチョウの枝が、青い空につんつん突き刺さっている。セーター一枚で出てきたから、氷の風がはだにしみる。寒い。

土曜の午後だった。高校生くらいのカップルが、ひどく深刻な顔つきでベンチに座っていた。犬を連れた七、八歳の男の子が二人、広場を走りまわっている。他に人影は見え、公園はがらんとして静かだった。

私はカップルからできるだけ離れたベンチに座り、白い事務用封筒を開けた。

やはり、白い便箋が一枚。北風がばたばたと便箋をはためかせて、中の文字まで吹き飛ばしそうな勢い。】

短い手紙だった。

『お元氣ですか？』

急に引越すことになりばたばたしていて連絡が遅れました。喧嘩したままでイヤだったけど、どうも、電話ができませんでした。

また、会えるといいね。

それじゃ、お元氣で』

なんて、そっけない。目を合わさずに、いやいやしゃべっている言葉みたいだ。

④私は胸がぎゅぎゅうした。

喧嘩は、つまらない喧嘩だった。この公園で、自転車の練習をした時、広一くんが、あんまりイクジナシの臆病者の鈍になったので私はかんしゃくをおこしたのだ。最高の男の子が、最低の男の子に変わるなんて、まったく許せなかった。

その喧嘩以来、私たちは会っていない。

50

45

40

35

30

25

私のかんしゃくなんて⑤みたいで、しょっちゅうなのに、広一くんは、雷にやられたイチヨウの木のように燃えてコゲて怒って傷ついてしまった。

私は、手紙を封筒に戻して、あたりを見まわした。美男でも美女でもないカップルは、手をつないで池のほうへ歩いていった。赤とグレーのスタジヤン、赤と緑のチェックのハーフ・コート。色のない十二月の景色の中で彼らは、とても暖かく見えた。

男の子たちとコリーは、キャッチボールをしている。

私は、早く大人になりたいと思った。

大人になれば、つまらない喧嘩をしたり、つまらない手紙をもらったりしないだろう。こんな冬の日にぴったりの好きな色のコートを買って、一番好きな人と手をつないで風の中を一日中だって歩ける。

進は手紙の内容を聞いてこなかった。一人でさっさと返事を書いて出してしまい、私はノケモノにされたような気がした。

だって、返事なんて、何を書くのよ。

——引っ越しちゃって残念です。喧嘩のことはもういいです。また、会えるといいね——

——引っ越しちゃって残念です。喧嘩のことはゴメンナサイ。また、会えるといいね——

「また、会えるといいね」なんて、つまらない言葉。だって、隣の県じゃない。そう思ったら、ほんとに会ってくればいいのよ。

⑥ 私は返事を書けずにイライラした。

進がピアノ教室に通い始めたのも、イライラに拍車をかけた。あいつがピアノを弾いてどうするの。広一くんのマネなのは、わかりきってる。イヤなやつだ。私はピアノのお稽古は大嫌いだし、お化けの出そうなハノンなんか聴かされたくないんだから。

でも、私は黙って、弟を見張っていた。ピアノを始めるくらいなら、そのうち、きっと広一くんに会うだろうと思ったのだ。

ところが、一向にそんな様子はなかった。

進は熱心にハノンとバイエルを練習し、私は不熱心にバツハインベンションとソナチネをお稽古した。そんなふうに冬は過ぎた。

やがて、春が来て、私は中学に進んだ。

ついに手紙の返事は出しそびれ、ピアノもやめた私は、^⑦楽譜を全部、弟に譲り渡した。

〈佐藤多佳子「サマータイム」より〉

□(1) ——線①「余計なお世話という顔を作った」とありますが、このとき佳奈が意図したこととして最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア おせっかいを焼きすぎると女の子に嫌われるということを、進に納得させようとした。

イ 手紙の中身を早く読みたい気持ちでいることを、進に悟られないようにしようとした。

ウ 人のプライバシーを侵害する行為は許されないわよという意味を、進に伝えようとした。

エ 広一くんからの手紙なんてべつにめずらしくないということを、進にわからせようとした。

□(2) ——線②「進はこちらなど見ていなかった」とありますが、なぜですか。次のア～エの中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 自分宛に来た手紙の内容に意識が集中していたから。

イ 姉は広一くんからの手紙に興味がなさそうだったから。

ウ おせっかいを焼くなど姉にしかられ、こわかったから。

エ いつも楽しみにしている手紙を、早く読みたかったから。

□(3) —線③「私はその奇妙な姿勢のまま両手を広げてバランスを取り、玄

関にのこのこ歩いていった」とありますが、このときの佳奈の気持ちとして最もふさわしいものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 手紙の中身に期待していることを隠しておきたい。

イ 待ちこがれていた手紙を一刻も早く読みたい。

ウ できるだけ早くこの場から立ち去りたい。

エ 弟の来ない場所でゆっくり読みたい。

□(4) 【十二月の公園へ吹き飛ばしそうな勢い。】の部分にある風や公園の

描写は、これから読む広一くんからの手紙がどういふものであることを予感させる表現ですか。次の空欄にあてはまるように二十字以内で答えなさい。

へ広一くんからの手紙が、
[] であること。

□(5) —線④「私は胸がぎゅうぎゅうした」とありますが、この時の佳奈の気持ちを次のように説明しました。
[A] [S] [C] にあてはまることばを、それぞれ答えなさい。

へ広一くんからの手紙が [A] だったので、 [B] たいと思っていた佳奈は [C] 気持ちになった。

□(6) [5] に当てはまる言葉として最もふさわしいものを、次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 春の陽炎 イ 夏の夕立 ウ 秋の長雨 エ 冬の大雪

□(7) —線⑥「私は返事を書けずにイライラした」とありますが、このときの佳奈の心情の説明として最もふさわしいものを次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア 手紙をもらったからには、返事を出すのが礼儀だと思う。でも、あまりにもそっけない手紙なので返事の手書きがなく、広一くに礼

儀しらずと思われるのも腹立たしくてイライラしてしまう。

イ 手紙をくれた広一くんの本心がわからないので、広一くんは私のことを嫌いになってしまったのかもしれないと思う。私にとっては大事な友だちだったので、こんなことになってしまつてイライラしてしまう。

ウ 同時に手紙をもらった弟は一人でさっさと返事を書いてしまい、私をノケモノにしようとしている。私はつまらない言葉しか思いつなくてプレッシャーを感じ、そんな自分にイライラしてしまう。

エ 返事が届かなければ広一くんは私がまだおこっていると思うだろう。でも、あの喧嘩は私にも責任があり、広一くに謝りたい気持ちがある。そのことが伝えられない自分にイライラしてしまう。

□(8) —線⑦「楽譜を全部、弟に譲り渡した」とありますが、この表現は佳奈がピアノをやめたことのほかに、どういうことを表現していますか。三十字以内で答えなさい。

〈随筆〉

⑦ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(立正中)

小学生の時から、見よう見真似で、詩を書きはじめました。^{*}綴り方の

時間に作文を書くのはたのしいことでしたが。それとは別に、散文とは違

った形の表現方法、^①とか、^②とか、そのころではまだなじみの

薄い、詩の形のあることが私をひきつけました。勝手に教科書以外の、

幼年雑誌、少女雑誌を読みあさって、四百字詰原稿用紙、って、どれをい

うのだらう、と^③ながら、投書規定を見て、投稿することを覚えまし

た。書きながら、読みながら、出しながら、書きながら、この行為のごく

自然なくり返し、いとなみ――。

家は、子供を働きに出さなければならぬほど生活に困っておりません

でしたが。母が私の四歳のとき亡くなり、次の母も、やがてまた次の母も

死ぬ、というような、少し複雑だった家族関係の中で「母親のないのが、

お前のピンボウ」と^{*}里方の祖母が、よく私の顔をのぞいてさみしく笑っ

たものでしたが。その貧乏がもたらした、もろもろの^{*}情感は、まけ惜し

みではありませんが、私にとって、充分豊富なものでした。

私は早く社会に出て、働き、そこで得たお金によって、自分のしたい、

と思うことをしたい、と思いました。で、学校を出なかったのは自分の責

任で、誰を恨む資格ありません。

^{*}高等小学校二年生は、だいたい翌年、働きに出るため、職業紹介所

の人が、生徒の希望を聞きながら面接に來たものですが。私は「店員」と

答えました。上級の優等生がデパートの食堂につとめて、白いエプロンの

うしろを大きな蝶結びにしているのが、とても立派でしたから。

すると若い担当員は、じつと、私の目を見て「むつかしいよ」と言いま

した。昭和九年（一九三四）、少女にとってさえ、深刻な就職難の時代で

した。私は二つの銀行に振り向けられ、そのひとつに入社いたしました。

それ以来三十年余り。今日まで、同じ所で働いています。

余談になりますけれど。はじめて月給をもらったとき、唇から笑いがこ

ぼれてしまつて、とてもはずかしかったのを思い出します。皆^④いま

したから。いま思えば、この時、私と同じようにお金も笑いこぼれていな

ければならないのです。なぜなら、私はこのお金で自由が得られると考

えたのですが、お金を得るために渡す自由の分量を、知らずにいたのです

から。

とにかく、その辺を社会の出発点といたしました。^{*}数え年十五歳の春

でした。

① つとめする身はうれしい、読みたい本も求め得られるから。

そんな意味の歌を書いて、少女雑誌に載せてもらったりしました。とて

も張り合いのあることでした。

と同時に、ああ男でなくて良かった、と思いました。女はエラクならな

くてすむ。子供心にそう思いました。

エラクならなければならないのは、ずいぶん面倒でつまらないことだ、

と思ったのです。愚か、といえ、これほど単純で愚かなことはありません

ん。

けれど、未熟な心で直感的に感じた、^②その思いは、一生を串ざしにし

て私を支えてきた、^③背骨のようでもあります。バカの背骨です。

④ エラクなるための努力は何ひとつしませんでした。自慢しているの

ではありません。事実ただけです。機械的に働く以外は、好きなことだ

けに打ちこみました。

その後、第二次世界大戦がはじまり、敗戦を迎えるのですが。

戦後、女性解放され、男女同権が唱えられ。結成された労働組合の仕

事などもいたしましたが。世間的な地位を得ることだけが最高に幸福なの

か、今迄の不当な差別は是非撤回してもらわなければならないけれど。男

たちの既に得たものは、ほんとうに、すべてうらやむに足るものなのか。

女のして来たことは、そんなつまらないことだったのか。という疑いを持
ち続けていたのです。

〈石垣りん「詩を書くことと、生きること」より〉

(注) 綴り方Ⅱ昔の小学校の国語での、文章の作り方。今の作文にあたる。

里方Ⅱ嫁、養子などの実家。

情感Ⅱ感情に訴えてくるような感じ。

高等小学校Ⅱ昔の学校制度で、小学校卒業後、さらに程度の高い教
育を受けることを希望する者が進んだ学校。高等科。

数え年Ⅱ生まれた年を一歳とし、以後正月ごとに一歳ずつ数える年
齢。

□(1) ① ② に入る最もふさわしいことばを次からそれぞれ選び、
記号で答えなさい。

ア 日記 イ 小説 ウ 俳句 エ 物語
オ 随筆 カ 短歌 キ 童話

(2) ③ ④ に入る最もふさわしいことばを次からそれぞれ選び、
記号で答えなさい。

③ ア 耳をすまし イ 首をまわし
ウ 指をくわえ エ 首をかしげ
④ ア スマシテ イ ワラツテ
ウ ヨロコンデ エ ホホエンデ

□(3) 線①「つとめする身はうれしい、読みたい本も求め得られるか
ら。」の部分に用いられている表現技法を次から一つ選び、記号で答えな
さい。

ア 倒置法 イ 名詞(体言)止め
ウ くり返し法 エ 擬人法
オ 呼びかけ法 カ 対句法

□(4) 線②「その思い」とはどういう「思い」ですか。本文中のことばを
用いて、三十五字以内(句読点も字数に数えます)でわかりやすく説明
しなさい。

□(5) 線③「背骨」と同じ意味を表すことばとして最もふさわしいものを
次から選び、記号で答えなさい。

ア 希望 イ 信念 ウ 常識
エ 我慢 オ 期待

□(6) 線④「エラクなる」とはどうなることですか。それを具体的に説明
している部分を、ここより後の本文中から十一字で書きぬいて答えな
さい。

□(7) 本文の筆者はどのような女性だと考えられますか。次から最もふさわし
いものを選び、記号で答えなさい。

ア エラクなることよりも、自分の好きな詩を作るために働き、生きて
きた、心豊かな女性。

イ 当時の貧しい社会に反発するために詩を作りつづけてきた、我慢強
い女性。

ウ 仕事の上での努力はあまりしないで、詩ばかりを作ってきた、自分
中心の女性。

エ できれば学校へ行って、詩の勉強をしたいと強く願っていた、夢多
き女性。